約１０年前頃、小学生を対象にお話しいただいたデータを元に、平和推進課よりいただいた、一昨年の１０月の被爆体験講和に沿いながら、伝承者用に加除訂正し、梶矢さんにも確認していただいた原稿です。

＜文字数＝約６８００字＞

＜P　～　＞は、プレゼンの番号です

＜P1＞

私は、○○　○○　と申します。

あの日、原爆を体験された、その人々の言葉を、しっかりと聞き、そして、受け止めて、原爆がもたらしたことを、その被爆者の強い思い、願いを、皆さんに伝えるため、こちらに来させていただきました。

＜P2＞

私が、皆さんに伝えるのは、被爆者であり、約３０年の長年にわたり証言活動をされております梶矢文昭さんです。

そのきっかけとなったのが・・・

梶矢文昭さんは、約４０年にわたり広島市内の小学校に勤められていました。

大変な思いをしながら、原爆のあの日、そして、それからの日々を生き抜き、戦争のない、平和な世界の実現を目指して、自らの辛い体験を、・・・・・

＜P3～5 ＞

このように、広島市、そして、全国の学校や地域を回って語ってこられました。

その思いを引き継ぎながら、少しでも支えることができればと、原爆が、広島に住む人々にどのような悲しみや苦しみをもたらしたか、その人々の話を聞き、平和の尊さを、伝えることができればと思っております。

梶矢さんが、いつも大切に話された言葉があります。

＜P6～7 ＞

「三たび許すまじ原爆を」「平和は尊（たっと）いぞ」

梶矢文昭さんは、１９３９年、昭和１４年に生まれられました。この１９３９年というのは、いわゆるナチス・ヒトラーがポーランドに侵攻して、第二次世界大戦が始まった年です。この時、まだ、日本はこの大戦には参戦していませんでした。

日本が太平洋戦争に加わったのは、昭和１６年であります。１９４１年１２月８日、いわゆる真珠湾攻撃によって、日本もこの大戦に参戦するのです。梶矢さんが２歳の時でした。

＜P8～10＞ 当時の状況について・・・・ 推進課からの資料１ページ後半から８ページ前半を参照

昭和２０年８月６日、梶矢さんにとって、今から７９年以上も前のお話です。今でも、その当時のことを、はっきりと記憶されています。そして、その場面一つ一つを、絵にされて、語り続けてこられました。

昭和20　年8 月6 日、前夜からの空襲警報で何度も防空壕に逃げ込んだそうです。　早朝、広島の天候は、晴れだったそうです。午前７時９分、ウーという警戒警報のサイレンが鳴って防空壕に入りました。この時飛来したB29 は１機で、原爆が目指すところに投下できるかどうか、その時の雲など

の気象状況を観測したものでした。　しばらくして警戒警報解除の緩やかなサイレンが鳴って防空壕を出たそうです。　７時31　分だったそうです。

＜P11 ＞
疎開＜そかい＞先から帰っていた国民学校３年生、二つ年上のお姉さんと、１年生の梶矢さんは一緒に、町内に設けられていた分散授業所に、お母さんに見送られながら、登校したそうです。
　分散授業所とは、空襲が激しくなってからは距離の遠い本校までは行かず、地区ごとにお寺や民家を借りて設けられていた臨時の教室のことです。広島市内の多くの学校が、この分散授業所の体制になっていたそうです。
梶矢さんが通っていたのは、今の広島駅新幹線ホームの西端付近の民家を借りて設けられていた荒神町＜こうじんまち＞国民学校大須賀＜おおすが＞分散授業所というところでした。
お姉さんと朝の掃除に取り掛かって玄関の方を雑巾＜ぞうきん＞がけしていたそうです。その後、バケツの汚れた水の交換をどちらがするかと、少し言い争ったそうです。
＜P12 ＞
すぐにお姉さんがおれて、バケツをもって、台所の流しの方に入って行った時だったそうです。梶矢さんは、何かの気配を感じたのか手を止めて、居間越しに庭の方に目をやっていたそうです。
＜P13 ＞
いわゆるエノラ・ゲイから、リトルボーイと名前が付けられた原子爆弾が投下されたのです。相生橋をめがけて投下され、少しずれて島病院の上空およそ６００ｍで爆発したのです。
＜P14 ＞
あたり一面を、ピカー！と光が覆い、次の瞬間、ドーン！と爆風が、きたのです。
＜P15 ＞
ピカーッ！という光により、瞬間、庭の八手＜やつで＞の葉が真っ黒になって溶けるのを見たそうです。
＜P16 ＞
次の瞬間、ドゥンンと爆風が襲いかかり、窓ガラスは、粉々に飛び散り、多くの方が、体中にガラスの破片が突き刺さり、崩れてきた家屋の下敷きとなり亡くなりました。
熱線と爆風で、多くの建物は一瞬にして潰れてしまったのです。
＜P17 ＞
その熱線により、大やけどをされた谷口すみてるさんという方がおられます。長崎の方です。
こうして大やけどを負われましたが、８８歳までの長年にわたり、自らの火傷の姿を見せながら、核兵器のない世界，平和を求めて活動されてきました。
＜P18 ＞
梶矢さんは、この爆風により、何かに叩きつけられ、真っ暗になった闇の中で身を縮めていたそうです。
どれくらいの間＜ぁいだ＞を耐えていたのか、だれも助けに来てくれることはなかったそうです。
＜P19 ＞
梶矢さんは家の柱の下敷きになりましたが、運がよく、ちょうど柱と柱がテントの屋根のように、守ってくれたのでした。この時の、ご自身について、よく頑張ったと言われています。「１年生で、６歳でよく頑張った。」と、自分への感謝の思いを持たれています。
＜P20 ＞
必死になって、柱と柱の間をくぐって、頭でこじ開け、壁土や藁のくさったような匂いは、今でも覚えておられるのです。崩れた建物の下から、くぐって、くぐって、何とか抜け出されたのでした。そこは崩れた屋根の上だったそうです。
＜P21 ＞
周りを見ると、どの家もどの家もつぶれていて、目の前の道を異様な姿となった人たちが列となって逃げていました。
たくさん、たくさんの人が、ぞろぞろ　ぞろぞろ、　　ぞろぞろ、ぞろぞろと、逃げていたそうです。まさに何百メートルもの長い列になって続いていたそうです。それに交じって、梶矢さんは無我

夢中で、ついて逃げていきました。
　そして、側溝には馬が仰（あお）けになってもがいていたのを見かけられました。
　今だったら、気持ちが悪くて、とても一緒には動けんと振り返っておられます。その時、人々は、火傷をし、骨も折れ、自分も、血を流している。でも、その時は、その痛みも忘れて、必死に、ほかの人々について逃げていかれたそうです。しかも、何も履いていませんでした。
＜P22 ＞
　そして、川に出てきた時のことです。これが猿猴川、向かい側は、白島という町、こちら側が二葉の里という町です。
　川に沿う道に出てきた時、対岸の白島町（はくしまちょう）の、川へと下りる石段には人が雪崩（なだれ）のようになって川原へと下りていたそうです。　その河原には、もうたくさんの被災者がいました。川には、人が死んで、浮き沈みして流れているのが見えたそうです。それでも、梶矢さんは、逃げて行く人の流れに遅れまいと懸命について逃げたそうです。　川沿いの崩れた家からは、火が噴き出してきたそうです。
　梶矢さんは瓦礫（がれき）の道をはだしで逃げていたそうです。　いや、ほとんどの人がはだしだったそうです。
　「何も履いちゃおらんかった。しかし、それも気にすることはなかった。」と、話されています。

＜P23 ＞
　二葉山＜ふたばやま＞の中腹まで被災者の流れに何とかついて逃げて行ったそうです。　そこはもう、被災者でいっぱいで、　眼下の広島の街がごうごうと燃え始めており、　黒煙を巻き上げ、まさに一面が火の海となっていったそうです。
　そこまでたどり着いたのが、９時半から１０時くらい、その後の記憶がないのだそうです。この山を下りるのが夕方の５時か６時ころ、その間、何をしていたのか、思い出せないそうです。ただ、ヨードチンキを塗ってもらう治療だけは受けた覚えが、あるそうです。

　広島の町は、夕方までごうごうと燃えとったそうです。夕方になって火が衰えをみせ始め、避難していた人々は山を下り始めていたそうです。　梶矢さんも、そこで出会った近所のおばさんに連れられて、家族を探しに山を下り、もし、父や母や姉が生き残っておれば避難しているはずだと思われる場所へ、鶴羽根（つるはね）神社から広島東照宮（とうしょうぐう）前を抜け・・・・・・
＜P24 ＞
　広島駅の北に広がる東練兵場（ひがしれんぺいじょう）へとたどり着いたそうです。
　そこは、広い原っぱです。しかし、その原っぱいっぱいが、被災した普通の人相じゃない人たちで埋め尽くされていました。「水をくれ、水をくれ」という声がすごかった。でも6 歳の梶矢さんにはどうすることもできませんでした。また、飼い主を探す犬がうろうろしていたのも覚えているそうです。
　捜し、捜し、うろうろ　うろうろしていると、さまよっている梶矢さんを近所のおじさんが見つけてくれ「梶矢の息子じゃろう。」と、声をかけてくださいました。そして、　「お父さんもお母さんも生きとってじゃ。じゃがのう、お母さんは血もぐれ（血まみれ）じゃ、早う行かにゃ、ありゃあ死ぬるで」　と言われたそうです。　自分では覚えていないが、梶矢さん自身も、頭部から顔面にかけて血を流しながらも、その時、大泣きをしたそうです。
＜P25 ＞
　そして、梶矢さんはその日の夕刻に、ご両親と再会できたそうです。でも朝まで一緒だった姉は、お母さんを前に、横たえられ、亡くなっていたそうです。母親も、もう血だらけだったそうです。その時の様子を描いた絵です。
　お母さんは、うめき続けておられ、そのお母さんの前の草の上にお姉さんが横たえられていたそうです。　そのお姉さんは、少しほほ笑んでいるように梶矢さんには見えたそうです。　これが不思議で、なんでお姉さんが死ぬときに、ほほ笑んだような顔になったのか、ずっと心に引かかっていたそうです。
　お姉さんは、分散授業所で柱の下敷きになり即死だったそうです。　同じ授業所にいた二年生の友達も即死していたことが後で分かったそうです。

原爆の時、熱線は大変。そして、爆風でガラスが割れる。ガラスが木っ端みじんに割れて、爆風で鉄砲の弾みたいに飛び散ってくる。防ぎようがない。母は、窓の近くで裁縫の仕事をしていたそうです。

母はガラス片が50個も60個も体に突き刺さり血だらけになってうめいていた。　左の眼球にも突き刺さり、それを父が抜きとっただけで、治療はなく左目は失明。　顔も傷だらけ、何十の傷痕と身体の中にまだ残っていたガラス片とともに、「死んでたまるか。死んでたまるか。」と、94歳までを生き抜かれたそうです。

今でも、梶矢さんは、中学生頃のことを覚えておられるそうです。参観日に、お母さんが来られ、まわりのみんなが、お母さんを指さして、「ありゃ誰のお母さんや、化け物みたいじゃ、だれのお母さんや。」片方の目はつぶれとる。頬っぺたも傷だらけ、だから、家に帰り「お母さん、来るな。来んでもええ。」と言ってしまい、お母さんが悲しい顔をしたのを、今でも、はっきり覚えておられるのです。そして、「ありゃ、すまんことをした、本当に、お母さんに、すまんことをした。」と後悔されているそうです。

お父さんは、傷を負いながらも母や姉を瓦礫から引き出したあと、救援活動に動き回っていたそうである。

＜P26 ＞

梶矢さんは血だるまの母のそばに寄り添い、まだ燃え続けている広島の市街を前に、一面の被災者のうめき声の中、8 月6 日の夜を過ごしたそうです。これが、その時の様子です。

＜P27 ＞

その東練兵場には、後に作家となられる今西祐行（いまにし　すけゆき）さんが、救援のため東練兵場に来ておられ、その時の様子を「わたしたちは、地ごくのまん中にたっていました。」と書いておられます。

同じくおられたのが　作家の原民喜さんです。被爆のとき、東練兵場近くの広島東照宮に逃がれて来られ、生き残った自分に自問自答しながら手帳にメモを残されています。　「コハ　今後生キノビテ　コノ有様ヲツタヘヨト　天ノ命ナランカ」。梶矢さんは、　語るとき、そのことばを時に思い起こしておられるとのことでした。

＜P28 ＞

それから、お母さんは、毎年、８月６日になるといつも泣かれたそうです。

そんな母を見ながら、梶矢さんは、「もういいかげん、泣くなや。」と、声を掛けましたが、

お母さんは、いつも「私が、娘を死なせてしまったようなもんじゃと……。」その後悔の思いを口にされていたそうです。

お姉さんは、当時、現在の北広島町（広島県）の親戚の所に縁故疎開されていましたが、着替えなどを持って行った母に「連れて帰って。うちゃ死んでもええ、死んでもええからお母さんと一緒がええ」と訴えられたそうです。

＜P29 ＞

夜も、ほとんど寝ることなく、お母さんの枕もとで「連れて帰ってくれ。連れて帰ってくれ。」と、言い続けられたそうです。

お母さんは、「広島は危ない。」そして、「いつ空襲があり、爆弾が落とされるかもわからん。」「新庄は、安全だから、ここにおれ。」と、繰り返されたそうです。

お母さんには、疎開させている子供を、もし連れて帰ったら、近所やお父さんからも叱られるだろうという思いもあったと、梶矢さんは、思われています。

諭されて一旦は諦めたお姉さんですが、

＜P30 ＞

広島に帰る母が乗るバスを泣きながら追いかけてきたんだそうです。戦争の時代、ガソリンなどはもうなく、その当時のバスは、木炭で動いたそうです。だからスピードがあまり出ず、のろのろ、のろのろだったそうです。

そして、坂道になり、さらにスピードが落ちた時、その姿を見かねたお母さんが、バスを止めてもらい、「よう、分かった。帰ろう。死ぬときゃ、一緒に死のう。」と、広島市内に連れ戻っていたそうです。

その４日後に、原爆が落とされたのでした。
＜P31 ＞
お母さんの前で、横になり少しほほ笑んだように死んでいたお姉さんは、お母さんと一緒にいたい。一緒にいたい。一緒にいたい。その思いが達せられた、ひょっとしたら、そんな思いが、あのほほ笑んだような死に顔になったんじゃないかと、想像されているそうです。

これ以降は、平和推進課より配布していただいた「被爆体験講和」Ｐ １２後半部分を参考にしてください。以下の内容は、数年前、私の方で、かつて話された内容や取材報道で出されたデータを編集したものです。

梶矢さんが長束小学校の校長になられた平成６年、職員から「子どもたちに被爆体験を話してほしい」という声が上がったんです。そこで１～６年生まで、特に低学年に伝えやすくするために、絵を描いて話しました。小学生500 、600 人が相手ですから、後ろの児童にも見えるように大きな画用紙にパステルで描きました。それが梶矢さんが紙芝居で被爆体験を伝えるようになったきっかけです。

最初に描いたのは、姉が死んでいたシーン。絵を少しずつ追加して、今も使い続けています。定年後に勤めていた広島市教育委員会での嘱託勤務を終えた平成13年、「ヒロシマを語り継ぐ教師の会」を発足されました。
以来、登録メンバーの被爆者が、子どもたちへ被爆体験を直接伝えています。幼稚園や低学年には、身振り手振りを大きくして、高学年にはより具体的に、日本が戦争に至った経緯や核爆弾の被害なども解説しています。梶矢さんの語りは45～60分程度ですが、子どもたちはよく聞いてくれますね。

＜P32 ＞
これが広島市の地図です。赤で囲ってあるのが半径２ｋｍ、この部分がほぼ全滅、炎上しております。
＜P33 ＞
ところが、現代の原子爆弾が広島に落とされたとしたら、その被害は、その数千倍に及ぶといわれています。この絵は、１００倍として描いたものです。半径２００ｋｍとなります。中国地方はもちろん、被害は四国や九州の一部におよびます。あの一発でこれだけの範囲が、あの時の広島のようになるのです。
さらに、灰の被害を考えると、2 ・3 発落とされると日本には逃げる場所はなくなるでしょう。使われたら使い返す、そんな世界になれば人類の存続どころか、地球は滅びてしまいます。持っている核をなくすことは早急には難しいでしょう。だから、その間、核を使うことは、絶対に許さないということを、世界で申し合わせることが大事だと思います。

三度目は許しちゃいけんのです。それを一人でも多くの子どもたちに伝えていきたい。そして彼らが大人になったとき、自分の子どもに伝えてくれることを願っています。

＜P34 ～38＞梶矢さんの自作です。

＜P39 ＞梶矢さんｎ自作です。
その後も東練兵場で数日をすごしたが、近郊の人々からの救援のむすび、軍人から配ってもらった乾パンの袋、その袋の底の方にあった金平糖＜こんぺいとう＞を口にしたときの甘味は、今も、感謝の気持ちと共に心にある。　＜

＜P40 ～P42 ＞ネット上のデータです。伝承者認定での使用はできません。

学校も、校舎は焼けて、戦後しばらくは、運動場で行う「青空教室」であった。

昭和23年にヘレン・ケラー女史が広島を訪れられた時、学童全員が引率されて沿道に並び夢中で手を振ったのを今でもはっきり覚えている。　朝鮮動乱のころ、まだ焼け跡や瓦礫の山は残っており、掘り返しては金属類を集め、小遣いにしていたこともあった。

＜P43　＞梶矢さんの写真です。使用可能です。

＜P44　＞１０月の広テレの企画報道で作成された写真です。上記の写真をＡＩ加工したものです。伝承者認定での使用はできないかと思います。